

# グアダラハラの陶磁器

長崎大学 野上 建紀

テンプロ・マヨール博物館 エラディオ・テロス・エスピノサ

Ceramics in Guadalajara, Mexico

NOGAMI Takenori (Nagasaki University)

Eladio Terreros Espinosa (Templo Mayor Museum)

## Abstract

We will introduce some collection of ceramics in Guadalajara and a ceramic workshop in Tonalá near Guadalajara.

Tokugawa shogunate banned Christianity and completed *sakoku* system that was a kind of sea ban system in Japan in 1639. As a result, the exchange between Japan and the Catholic countries, such as Spain and Portugal, officially discontinued. However we can find some evidence of material exchange between Japan and New Spain. For example, many pieces of Japanese porcelains were exported from Nagasaki to New Spain in the second half of 17<sup>th</sup> century and the first half of 18<sup>th</sup> century. One pair of jar colored with enamel in the cathedral church in Guadalajara is one of the evidences. They were jars that were produced in the first half of 18<sup>th</sup> century in Arita, Japan. Under the *sakoku* system, they were imported from Nagasaki to Mexico.

Chinese porcelain and Japanese porcelain had crossed the Pacific Ocean. On the other hand ceramic production technology came from Europe to New Spain. Tonalá ware near Guadalajara is ceramic made by introducing European technology.

**Key Words:** Imari ware、Guadalajara、Tonalá ware、Hasekura Tsunenaga

## 1. はじめに

グアダラハラは、メキシコ中央高原の北西部に位置するメキシコ第2の都市であり、ハリスコ州の州都でもある（図1）。歴史地区の中心部には大聖堂があり（図2）、その四方をアルマス広場、グアダラハラ広場、リベラシオン広場などの広場が取り囲んでいる。筆者は、2010年10～11月、2017年11月の二度、この都市を訪れている。

筆者は2006年からメキシコをはじめとした中南米で陶磁器、主に伊万里の考古資料の調

査を行なってきた。伊万里の出土分布範囲は中米のメキシコ、グアテマラ、カリブ海のキューバ、南米のペルー、コロンビアである。その中心はやはりヌエバ・エスパーニャの中心である今のメキシコである。メキシコではメキシコシティ、プエブラ、オアハカ、アカプルコ、ベラクルス、ウエホティンゴの諸都市などで出土している。グアダラハラ調査目的の一つは伊万里を探すことであったが、結論から言えば、考古資料ではまだ確認されていない。

メキシコをはじめとした中南米に渡った伊万里は、主に17世紀後半～18世紀前半のものである。清の海禁政策下の17世紀後半の伊万里については長崎から唐船によって台湾などを経由しながらマニラに運ばれ、マニラからガレオン船でアカプルコに運ばれたことが明らかになっている（野上2013）。一方、展海令以降となる17世紀末～18世紀前半の伊万里の輸出ルートはよくわかっていない。なぜなら展海令以降、長崎からマニラに伊万里を運んでいた唐船が伊万里ではなく、主に中国磁器を扱うようになるためである。そして、グアダラハラの大聖堂にはその17世紀末～18世紀前半の伊万里の色絵壺が残っている。この壺の調査も今回のグアダラハラ調査行の目的の一つである。

## 2. グアダラハラの日本人

一人の日本人がグアダラハラ大聖堂の中央祭壇の福音書側の外廊にある聖キリストの祭壇の傍に葬られている（ファルク・パラシオス2010）。彼の名はファン・デ・パエス、1675年12月15日にグアダラハラで亡くなっている。69歳であった。彼をはじめとしたグアダラハラで暮らした日本人について、ファルクやパラシオス、大泉の研究成果を元に述べようと思う。

17世紀のグアダラハラには日本人が暮らしていた。氏名が判明している者は、ファン・デ・パエスやルイス・デ・エンシオの他、ファン・アントン、アグスティン・ロペス・デ・ラ・クルスである。これらはいずれもスペイン語名を挙げたものであるが、日本名が推測できる者もいる。それがルイス・デ・エンシオである。なぜ推測できるかと言えば、エンシオがグアダラハラで一定期間、日本語でサインを行っていたからである。1634年5月16日付および1638年4月16日付で作成されたスペイン人フランシスコ・デ・レイノソとの間で交わされた小売業の共同経営に関する2枚の契約書に漢字で日本名を署名した脇に平仮名でスペイン語名が添えられている（大泉2004）。その日本名について大泉は福地蔵人

と解説しているが、ファルクらはフクチ・ソウエモン（あるいはヒョウエモン）と読んでいる。

また、ルイス・デ・エンシオについて、1650年に作成された一通の文書<sup>1</sup>の中に「エンシオの年齢は55歳前後である」との記述がある（ファルク・パラシオス2010、p51）。この記述が正しいとすれば、エンシオが生まれたのは1595年前後であり、前記の小売業の共同経営の契約を交わしたのは、30代後半から40代前半の頃となる。1666年に亡くなっているので享年は71歳と推定される。

それではルイス・デ・エンシオはいつヌエバ・エスパーニャに渡ったのか。トーマス・カルボは、グアダラハラで暮らしていた日本人について、セバスティアン・ビスカイノとともにヌエバ・エスパーニャにやってきたと考えるのが妥当とする（ファルク・パラシオス2010）。つまり、支倉使節団の一員であったと推論している。林屋永吉も、エンシオがヌエバ・エスパーニャに渡ってきた経緯について同様の考えを示している（ファルク・パラシオス2010）。支倉使節団とは言うまでもなく、セバスティアン・ビスカイノ使節団の帰国に際し、伊達政宗が派遣し、ヌエバ・エスパーニャへの訪問を行った使節団である。彼らの船、サン・ファン・バウティスタ号がヌエバ・エスパーニャに到着したのは1614年のことであった。

すなわち、ルイス・デ・エンシオは16世紀末に日本で生まれ、17世紀初めに太平洋を越えてヌエバ・エスパーニャに渡り、その後、商売を生業とした後、1666年に没し、大聖堂に埋葬されたというわけである。そして、そのルイス・デ・エンシオの娘マルガリータの婿がファン・デ・パエスである。パエスの死の間際に、遺書の中で自らが日本人であるということだけでなく、さらに具体的に大坂生まれであると書き残している。

パエスについては、1658年に作成された文書に、「40年以上、グアダラハラに居住している」、「年齢は50歳前後である」と自身について記しており、これに従えば1608年前後に生まれたことになる。1635年か1636年にマルガリータと結婚しており、彼女との間に9人の子供をもうけ、多くの使用人や奴隷を有しながら、実業家として経済的な繁栄を遂げ、大聖堂の財産管理人も務めている。最期には成功者として聖キリストの祭壇の傍に葬られている。ファンの通夜と葬儀について、アルツェロ・チャベス・アジョエは、「パエスの死を悼む鐘の音が鳴り響き、パエスの死をグアダラハラ中に伝えるとともに、パエスの魂

<sup>1</sup> インディアス総合公古文書館所蔵

の平安を祈るよう人々に促した。」とある（ファルク・パラシオス2010）。グアダラハラの名士としての最期を迎えたことがわかる。

伊万里が中南米にもたらされた17世紀後半には、ヌエバ・エスパーニャでまだ日本人が暮らし、中にはパエスのように実業家として大きな成功を収めたものもいた。すでにいわゆる「鎖国」が完成してから数十年経ており、日本との直接的な交流は途絶えているが、遠くヌエバ・エスパーニャでは「移民」の第一世代から次の世代へと時代が移り変わろうとしている頃であった。

### 3. グアダラハラ大聖堂の伊万里

エンシオやパエスが没した頃、伊万里の生産地の肥前では、朝鮮半島から日本に連れ帰られた朝鮮人陶工の第一世代から次の世代へ技術が引き継がれ、世界の市場に向けて伊万里を輸出するようになっていた。

そして、ルイス・デ・エンシオやファン・デ・パエスが葬られた大聖堂の聖具室（香部屋）の祭壇にキリスト像を挟んで一對の伊万里の色絵壺が飾られている（図3・4）。これらの色絵壺は、17世紀末～18世紀前半に有田皿山の内山地区で焼かれ、赤絵町で色絵付けされたものである。染付と色絵を合わせた金襴手製品である（図5）。本来は蓋付きの壺であり、この壺3個と広口瓶2本と組み合わせて1セットであることが一般的である。胴部には区画された枠内に桜花文、牡丹文が描かれ、肩部には染付の青地に白抜きされた部分に唐獅子と牡丹が描かれている。また頸部には菊花と牡丹、底部近くにも同様の文様が入る。オランダ東インド会社が有田に注文して焼かせたものであり、その主な市場はヨーロッパであるが、同時代の伊万里の色絵壺はアフリカのケープタウン、モンバサ、トルコのイスタンブールのトプカプ宮殿、インドネシアのバタビア、バンテン、チレボン、ブトンなど広い範囲に流通している。

大泉はルイス・デ・エンシオあるいはファン・デ・パエスが大聖堂に寄贈した可能性をあげているが（大泉2004：218）、ルイス・デ・エンシオ、ファン・デ・パエスの没年がそれぞれ1666年、1675年であり、壺が焼かれる数十年前にはすでに二人は亡くなっている。そのため、彼らと直接、関わりがあるものではない。大聖堂の財産管理人となったパエスは、教会所有の奴隷の売買、家屋の賃貸契約、人件費や旅費の支出などの他、聖具室のワックス塗りも命じるなど施設管理も行なっている。聖具室に残る肥前の色絵壺が当時、教会

所有となったものであれば、その管理も財産管理人の仕事であったと思われる。パエスの役割を引き継いだものが入手、管理を行ったのであろう。

さて、これらの色絵壺はどのような経路をたどってグアダラハラに持ち込まれたのであろう。前にも述べたように17世紀後半の伊万里については、長崎～（台湾）～マニラ～アカプルコの太平洋ルートであることがわかっているが、17世紀末～18世紀前半の伊万里についてはよくわかっていない。ルートは大きく二つ考えられる。太平洋ルートと大西洋ルートである。太平洋ルートは17世紀後半と同様のものであるが、大西洋ルートは長崎からオランダ東インド会社によってヨーロッパに運ばれたものをスペイン人が入手して、大西洋を渡ってベラクルスに持ち込んだというものである。中国磁器が運ばれたのは太平洋ルートであることは明らかであり、金襴手の伊万里などを模倣したチャイニーズ・イマリが大量に生産される中で、あえてヨーロッパから大西洋を越えて伊万里を運ぶだけの需要があったか疑問である。むしろ伊万里は中国磁器とともに太平洋を越えて運ばれたとする方が大枠としては可能性が高いと思う。一方、17世紀後半に台湾などを経由してマニラに伊万里を運んでいた唐船が17世紀末以降は主に中国磁器を扱うようになったため、長崎からマニラへの流通ルートと担い手については改めて考えなくてはならない。

そこで一つの可能性として考えられるのは、バタビアなど東南アジアの陶磁器の集散地からマニラへ運ばれるルートである。バタビアへはオランダ東インド会社の船が長崎から大量に伊万里を運んでいる。その場合、マニラへ運ぶ担い手はやはり唐船しか考えられないであろう。もう一つの可能性として考えられるのは、17世紀後半と同様に長崎からマニラへ他の港市を經由しながら唐船が運び続けていたというものである。唐船が扱う磁器が主として中国磁器であったとしても長崎に来航した唐船の一部が伊万里も運んでいたことは考えられるし、記録にも残っている。特に清朝による18世紀前半に再度、海禁を行なっている。その際には大量のカップ&ソーサーを唐船が長崎から積み出している。その年代はグアダラハラの色絵壺の生産年代とかけ離れたものではない。

今のところ、まだ流通ルートに関しては確証があるわけではないが、グアダラハラの色絵壺はまず有田の内山のいずれかの窯場で焼かれ、それが赤絵町に持ち込まれて上絵付けされて完成する。次に長崎からオランダ東インド会社の船によってバタビアに運ばれ、さらにバタビアからマニラへ唐船によって運ばれる。あるいは唐船によって長崎から積み出され、マカオやバタビアを經由してマニラへ運ばれる。そして、スペイン船によって太平洋を渡って、アカプルコ、メキシコシティ、グアダラハラへと運ばれた可能性を考えるこ

とができる。

そして、大聖堂の聖具室には、伊万里の色絵大壺だけでなく、多くの陶磁器が所有されている（図6～8）。多くは幕末から明治期にかけての日本製の色絵大瓶である。色絵窓絵桜花鳳凰文大瓶、色絵風俗人物文双耳付大瓶（一对）、色絵白鷺文大瓶、イッチン技法で外面いっばいに装飾を施した色絵風俗人物文大瓶（一对）、同種の技法による色絵人物文壺、色絵武者絵壺（一对）などが飾られている。18世紀の清朝の色絵蓋付壺（一对）も所蔵されている（図8の右）。また、色絵牡丹菊花文大壺の上半部を切り除いたものに金属装飾を取り付けて大鉢状の形にしたものも1点ある。

#### 4. グアダラハラ出土の東洋磁器

メキシコ各地の遺跡から数多くの東洋磁器が出土している。前述したように伊万里の出土も見られる。グアダラハラおよびその周辺における東洋磁器の出土状況と伊万里の出土の有無を調べるために、2017年11月に国立人類学・歴史学研究所のハリスコ州のセンター（Centro INAH Jalisco）で出土遺物の調査を行った（図9・10）。スペイン植民地時代の遺物についてはあまり整理が進んでおらず、トナラ Tonalá のカトリック教会である Parroquia Santiago Apóstol から出土した小片2点を確認したのみであった（図11）。1点は18世紀の清朝磁器であり、褐釉掛け分けの色絵片である。小碗か小皿とみられる。1点は青絵具で上絵付けされた産地不明の色絵片である。

今回の調査では少量、磁器片が確認できたに過ぎないが、グアダラハラの都市の規模、歴史を考えると、今後、さらに確認される可能性は高く、とりわけ教会や修道院などキリスト教施設の発掘調査では出土する可能性が高い。

#### 5. グアダラハラの焼き物

グアダラハラの東方は、ハリスコ州の焼き物生産の中心地である。トラケパケ、トナラなどがその代表的な産地である。グアダラハラ郷土博物館(Museo Regional Guadalajara)では、先史時代から現代までの地域の焼き物が展示されているが（図12）、博物館の中庭にはトナラ焼などの浴槽や水瓶などが展示されている（図13～15）。中には1868年の年号が書かれたものも含まれている。

トナラ焼はグアダラハラから約11km 東にあるトナラで焼かれたやきものである。先スペイン時代からの土器づくりの伝統にスペイン植民地時代にスペインの技術が加わり、さらに近代になって高火度焼成も行われるようになった。褐色の胎土の器に彩色を施したものが多く、素朴な土器に近いものから精製された原料を用いて高温で焼いた施釉陶器までさまざまである。器種も調理具、貯蔵器、碗・皿などの食器など多種にわたっている。近年では装飾品としての陶器も焼かれている。

トナラの街中には民芸品としてトナラ焼を売る店が並び、定期的に開かれる露天の市でも売られている（図16・17）。特にムニシパル・トナラ市場やトナラ中央広場を中心に市が立ち並ぶ。トナラ中央広場に面したベニート・ファレス通りが東に突き当たった位置にサント・サンチアゴ寺院（Templo Santo Santiago）がある（図18）。教会内の各所に褐色の素地に主に白絵具で加彩された大壺が配置されている（図19）。

トナラの街中の現在の工房を訪ねた。ホセ・ベルナベ工房（Jose Bernabe）である（図21）。看板にはギャラリー・ベルナベとあり（図20）、4世代にわたる芸術と伝統の200年と掲げられている。パンフレットや紹介記事によると、1825年から陶器づくりを始め、世代を超えて受け継がれた技術により焼き物づくりをしているという。日本で言えば、伝統工芸士に相当するような資格を持ち、数々の賞も受賞している。

工房では原料採掘以外のほぼ全ての工程が行われている（図22）。製土、成形、装飾、素焼き、施釉、焼成の過程をたどる。ミルで粘土を粉碎した後、水を加えて寝かせて、原料を作り（図23）、成形は、石膏型を用いた型成形技法、蹴ロクロや機械ロクロによるロクロ成形技法によって行われている（図24～27）。器種は多様であるが、高級品は皿と壺が多い。装飾は主として絵筆を用いた手描きによる絵付けである。有田などの絵書き座のような特別な空間はなく、乾燥した空の下、軒下に椅子を並べて絵が描かれていく。ペタティージョ（petatillo）と呼ばれる精緻な布地模様（クロスハッチング）や点描模様の地紋に花、鳥、兎などの動物を描いたデザインが特徴である（図31）。店の看板にも「CE-RAMICA PETATILLO」とあり、文字通り、店の看板商品である。

焼成はガス窯を使用し、窯積みは棚板積みである（図32・33）。色見孔から内部を覗いて温度管理を行うが、ゼーゲルコーンも使用する（図34）。一度、素焼きを行った後、エナメルをかけて、焼成を行う。工房に隣接したギャラリーを兼ねた店舗で購入することができる。

## 6. おわりに

いわゆる「鎖国」時代にもグアダラハラでは日本人が暮らしていた。彼らは17世紀初めにメキシコに渡ったと推定されているが、彼らがグアダラハラの社会の中で活躍し、祖国を離れた地で底深い眠りについた頃に、日本の焼き物である伊万里が太平洋を渡って、グアダラハラに持ち込まれている。それらはちょうど彼らが太平洋を渡った頃に日本で初めて誕生した磁器であり、その後に世界商品にまで発展したものであった。その一つがグアダラハラの大聖堂に残されている伊万里の色絵大壺である。

アジアの磁器は太平洋を越えて、グアダラハラへ渡ってきたが、陶器生産の技術は大西洋を渡ってきた。グアダラハラの東方に位置するトナラでは、スペイン植民地時代以前の土器作りにヨーロッパの陶器生産技術が加わり、今のトナラ焼に繋がる焼き物が誕生した。

グアダラハラの現地のアメリカ大陸の在来の文化土壤に、アジアとヨーロッパの二つの文化が交差し、複雑で豊かな文化が醸成された。それは陶磁器だけでなく、多くの分野で見られたことでもあると思われる。

今回の調査研究にあたり、多くの方のご支援とご協力を賜った。芳名を記し、心よりの謝意としたい。

Miguel Angel (グアダラハラ大聖堂)、Roberto Velasco Alonso (グアダラハラ郷土博物館)、Roberto Junco Sánchez (国立人類学・歴史学研究所)、Galería Bernabe (ホセ・ベルナベ工房)、Marisol Lopez Martinez (順不同)

本研究は、JSPS 科研費 JP17H02375の助成を受けたものです。

### 引用文献・参考文献

- 大泉光一2004『メキシコの大地に消えた侍たち－伊達藩士・福地蔵人とその一族の盛衰－』新人物往来社
- 野上建紀2013「ガレオン貿易と肥前磁器－二つの大洋を横断した日本のやきもの－」『東洋陶磁』第42号141－176
- メルバ・ファルク・レジェス、エクトル・パラシオス2010『グアダラハラを征服した日本人－17世紀メキシコに生きたファン・デ・パエスの数奇なる生涯』(服部綾乃・石川隆介訳) 現代企画室

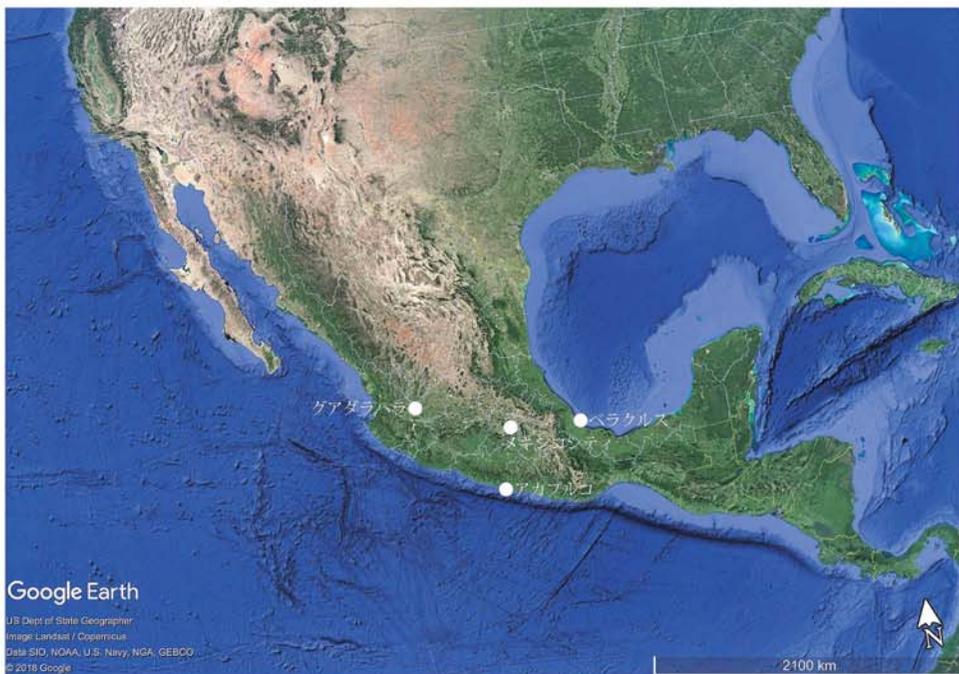


図1 グアダハラ位置図



図2 グアダハラ大聖堂



図4 グアダハラ大聖堂のキリスト像と伊万里



図3 グアダハラ大聖堂の聖具室



図5 グアダラハラ大聖堂所蔵の伊万里の色絵大壺（一対）



図6 グアダラハラ大聖堂所蔵の陶磁器（1）



図7 グアダラハラ大聖堂所蔵の陶磁器（2）



図8 グアダラハラ大聖堂所蔵の陶磁器(3)



図9 Centro INAH Jalisco 収蔵庫・整理室



図10 Centro INAH Jalisco 作業風景



図11 トナラ出土磁器片



図12 グアダラハラ郷土博物館



図13 グアダラハラ郷土博物館所蔵品(1)



図14 グアダラハラ郷土博物館所蔵品(2)



図15 グアダラハラ郷土博物館所蔵品(3)



図 16 トナラの露天市場で売られるトナラ焼 (1)



図 17 トナラの露天市場で売られるトナラ焼 (2)



図 18 トナラのサント・サンチアゴ寺院



図 19 トナラのサント・サンチアゴ寺院内部



図 20 ギャラリー・ベルナベの看板



図 21 ホセ・ベルナベ工房

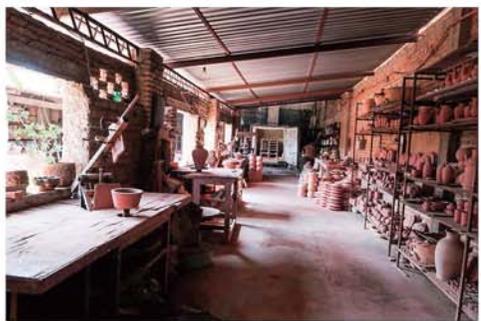


図 22 ホセ・ベルナベ工房 (内部)



図 23 ホセ・ベルナベ工房 (製土機械)



図 24 ホセ・ベルナベ工房（石膏型）



図 25 ホセ・ベルナベ工房（石膏型）



図 26 ホセ・ベルナベ工房（機械ロクロ）



図 27 ホセ・ベルナベ工房（蹴ロクロ）



図 28 ホセ・ベルナベ工房（絵付け）



図 29 ホセ・ベルナベ工房（絵付け）



図 30 ホセ・ベルナベ工房（絵付け道具）



図 31 ホセ・ベルナベ工房（絵付けされた皿）



図 32 ホセ・ベルナベ工房（ガス窯外観）



図 33 ホセ・ベルナベ工房（ガス窯内部）



図 34 ホセ・ベルナベ工房（ゼーゲル・コーン）



図 35 ホセ・ベルナベ工房（製品）



図 36 ホセ・ベルナベ工房（製品）



図 37 ホセ・ベルナベ工房（製品）



図 38 調査にご協力頂いた方々（左：グアダハラ大聖堂、右2枚：Centro INAH Jalisco のスタッフ）